

archive
vol.30

A-Lab ☒ Exhibition Vol.28

A-Lab Artist Gate 2021

新鋭アーティスト発信プロジェクト

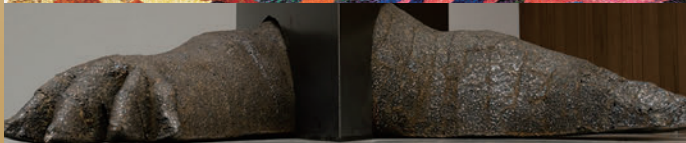
河原雪花



鈴木大晴



鐵羅佑



藤本純輝



茂木山スワン



山下茜里



A-Lab archive



新鋭アーティスト発信プロジェクト「A-Lab Artist Gate」

本プロジェクトは今後の活躍が期待される若手アーティストによるグループ展。大学を卒業か大学院を修了され新たなステップに羽ばたこうとしている若手アーティストをご紹介しますプロジェクトです。

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.30

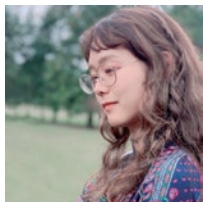
A-Lab Artist Gate 2021

新鋭アーティスト発信プロジェクト

目次

■ 出展作家	1
河原雪花	1
鈴木大晴	3
鐵羅佑	5
藤本純輝	7
茂木山スワン	9
山下茜里	11
■ ライブ 映像と音楽のライブイベント	13
■ アーティスト・トーク	15
■ フライヤー・配布資料	32

■ 出展作品



河原 雪花 Kawahara Setsuka

1997年 生まれ。大阪府出身。

京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻構想設計修了。

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2021「六甲ミーツ・アート芸術散歩2021」招待出展

2021「京都市立芸術大学作品展」市長賞

2019「Prague Youth Film Festival」短編部門最優秀賞



[青い城]

- statement -

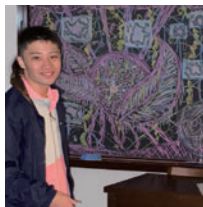
『青い城』は切り絵を用いたアニメーション映画です。

この作品はポーランドの古いおとぎ話「ワルシャワの人魚伝説」と

ルーシー・モード・モンゴメリの小説『青い城』をベースにしています。

異なる存在と共に生きることや、女性をとりまく問題について考えながら制作をしました。





鈴木 大晴 Suzuki Daisei

1998年 生まれ。京都府出身。京都精華大学テキスタイルデザインコース卒業。

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2021「ユスカル!2020アート部門」大賞

2021「京都精華大学展 2021」学長賞

2021「Heavenly Ams」、京都Media Shop、京都



[おこっていること、うつっていること]



[2020 木漏れ日]



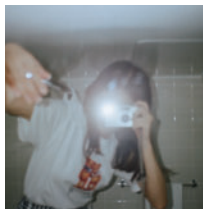
[2020 山]



[宝石と春]

- statement -

そこにしか無い空間、息をしている物を作る為、残す為に織という技法を使い表現しています。



茂木山スワン Mogiyama Swan

1998年 生まれ。北海道出身。大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業。

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2021「大阪芸術大学卒業制作展2021」優秀賞(富士フィルム賞)

2019「芦屋写真展」入選

2019「仁川東アジア文化都市写真映像フェスティバル」金賞



- statement -

日常とはチープなものだ。

日常にないものが日常に欲しかった。

お祭り、クリスマスのチキン、イベントで突如現れるメリーゴーランド、5月に満開に咲く薔薇は年に1度しかない。

日常に欲しいと思った。

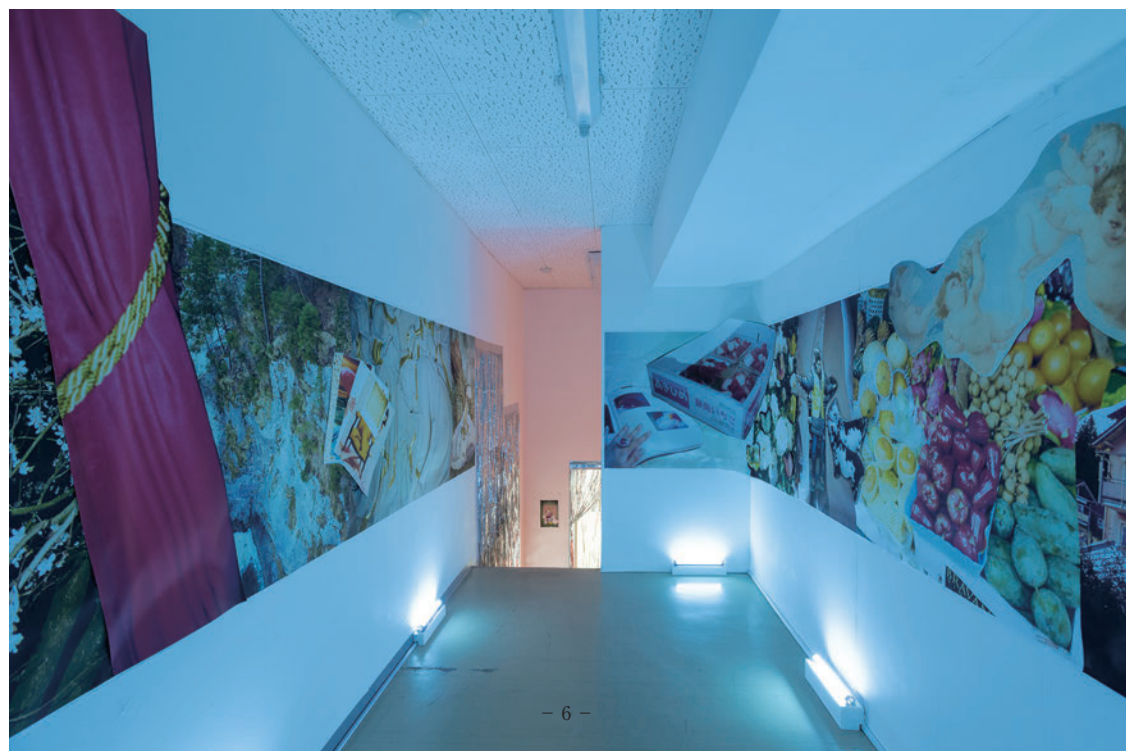
教会、ヴィーナス、天使、石像などの美術品は憧れた。

非日常を手にした。

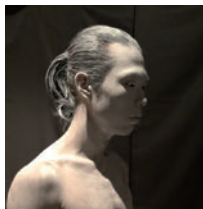
わたしの今までの非日常に手で触れて切って貼ることで、わたしは手に入れようとした。



[Shake Shake hell]



■ 出展作品



鐵羅佑 Tetsura Yu

1998年 生まれ。愛知県出身。

京都精華大学芸術学部造形学科立体造形コース卒業。

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2021「京都精華大学卒業制作展」、京都精華大学、京都

2020「京都精華大学立体造形コース進級展」、京都精華大学、京都

2019「京都精華大学立体造形コース秋展」、京都精華大学、京都



「潜む」

- statement -

金属溶接、主に鉄のアーク溶接を中心として、その溶接痕によって生まれる
普段は目にしないような鉄の表情を利用し作品を制作する。

舞台表現も行っており、その経験を活かして劇的な表現を展開する。

二つの芸術分野が互いに影響しあうことで生まれる新しいジャンルの表現を目指して活動している。





藤本純輝 Fujimoto Atsuki

1997年 生まれ。三重県出身。

京都芸術大学大学院芸術研究科修士課程

芸術専攻美術工芸領域油画分野修了。

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2021「ARTIST'S FAIR KYOTO 2021」Akatsuki ART AWARD 優秀賞

2021「ART!ART!OSAKA」、大丸梅田店、京都

2021「DAWN-EXPOSITION 2021.04-」、GINZA SIX 6F 蔦屋書店、東京



[Iris_10]

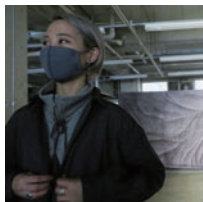
- statement -

私は、モチーフや素材、色や絵具の配置など、画面を構成する要素と繊細に向き合い絵画を創造する。

素材の持つ性質に着目し、その都度下地に用いる布の材質を変えている。木枠に綿布とシーツ生地を重ね合わせて用いており、シーツ生地のきめの細かい質感と画面下への抵抗感の無さが淡くやわらかい光を画面に生む。

布や絵具の塊による素材の群生は、素材と図像を変容し合い、画面にアイリスの群生している池の光景を創出する。





山下 茜里 Yamashita Akari

1997年 生まれ。大阪府出身。京都精華大学大学院博士前期課程修了。

【近年の主な展覧会・受賞歴】

2021 「第2回丹波アートコンペティション」 大賞

2021 「PICKS」、サテライトスペースDemachi、京都

2020 「YAMASHITA Akari Solo exhibition-BORDER-」、KUNST ARZT、京都

- statement -

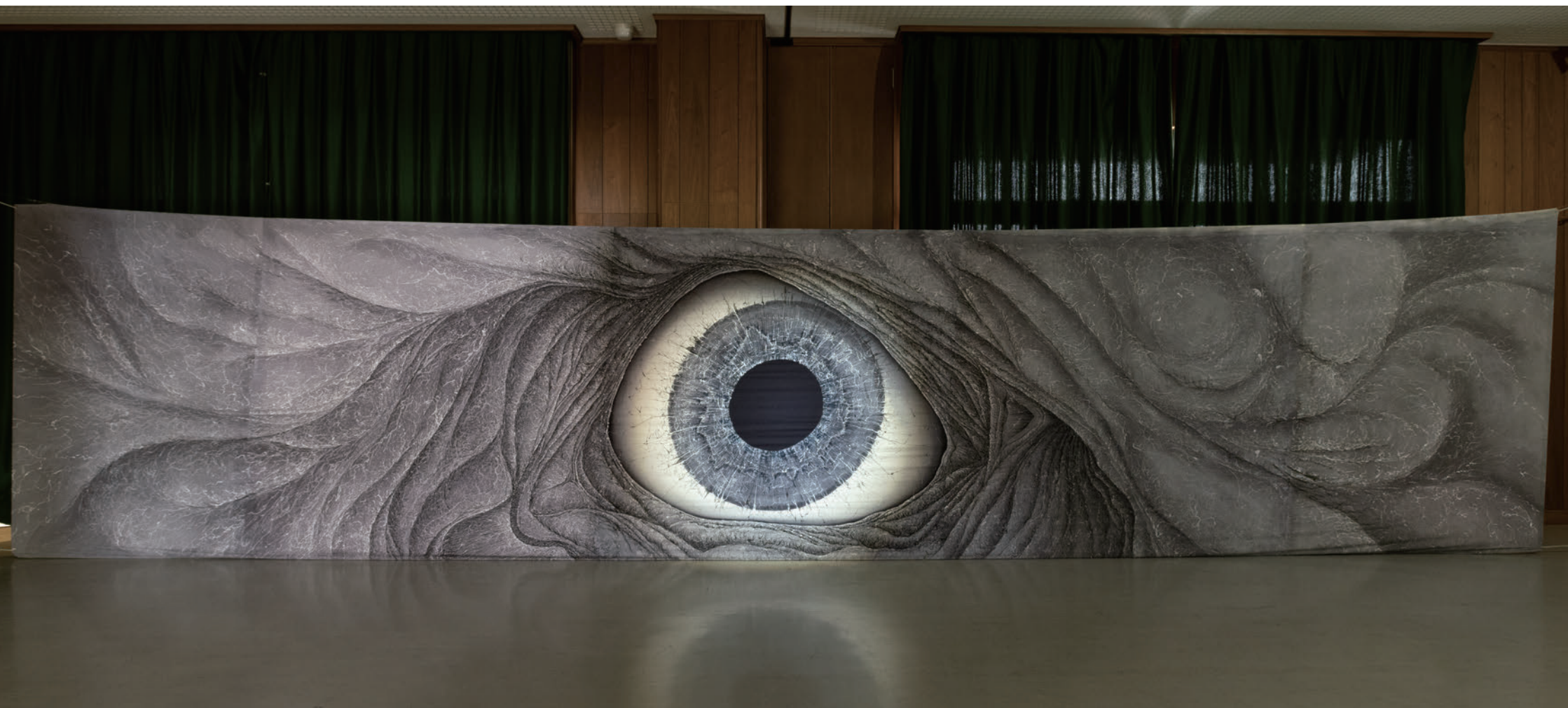
鏡は割れると何も映さなくなる。

あなたを映さない「目」を作るには、この「目」を割ってしまえばいいと考えた。

銃弾が鏡を一瞬で破砕する様を思い出した。

あなたが銃弾の様に、わたしの目を貫いていった時、

わたしの目にはもうあなたは映らない。



A-Lab Liveperformance

出演 河原雪花、小林奏子
日時 令和3年6月13日(日) 15時～・16時～
場所 あまらぶアートラボ「A-Lab」 Room3

「青い城」を制作した出展作家・河原雪花さんがこの作品で音楽・音響を担当した小林奏子さんと、映像と音楽のライブイベントを開催いたしました。



A-Lab Artist Talk

出演	コーディネーター：おかけんた（タレント（吉本興業株式会社所属） アートプランナー、A-Lab アドバイザー）、河原雪花、鈴木大晴、藤本純輝、 茂木山スワン、山下茜里
日時	令和3年5月30日（日）15時～17時
場所	あまらぶアートラボ「A-Lab」Room1



トークイベントの様子

おかけんたさん（以下：おか） おかけんたです。よろしくお願ひ致します。みなさんいかがお過ごしでしょうか。今ちょうど私の後ろにアーティストさんがいらっしゃるんですけども、これからお一人ずつ作品やご自身のこと、アトリエ、ターニングポイントをお聞きていきたいと思ひます。それでは早速アーティストの方々にお話をうかがいます。最初は河原雪花さんです。よろしくお願ひします。

河原雪花さん（以下：河原）：河原雪花です。よろしくお願ひします。

おか：それでは河原雪花さん、まず学校のことからお聞きしていきたいと思ひます。どちらの大学でしょうか？

河原：京都市立芸術大学です。

おか：こちらのお写真は？

河原：大学ですね。

おか：きれいですね。

河原：これは池なんですけど、池の中に埴輪が2体立っています。

おか：この埴輪はなんですか？

河原：埴輪の1体は藤浩志さんという方の作品です。

おか：藤浩志さんの作品なんですね。

河原：はい。だいが前に作られたもので。横の埴輪は私が1回生の時に課題の流れで作った偽埴輪なんですけ

ど、今は2体池の中に沈んでいて、忘れ去られています。

おか：えっ？藤浩志さんの横にそういう風に作品を学生さんが展示して大丈夫なんですか？

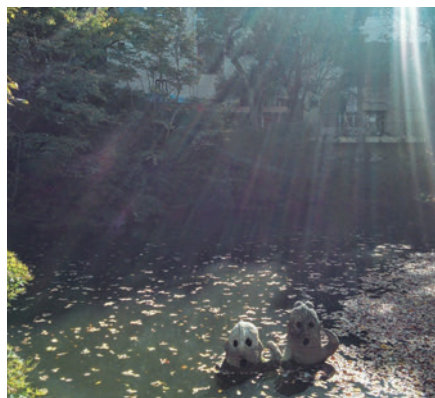
河原：課題の流れから結果こうなってしまった感じです。

おか：ちなみに藤浩志さんの作品とかはご存知ですか？

河原：いや、その時は誰も知らなくて。

おか：実は、藤浩志さんご自身からこのお話を伺ったことがあって。多分誰も知らないと思ひますと、ご本人もおっしゃっていましたからね。こういう発想はどういうところから出てきたんですか？

河原：1回生の時に企画プロデュースをする課題が出さ



れて、グループで埴輪をシンボルにしようみたいな企画から始まりました。まずシンボルにするにはどうしたらいいかというところから、当時1回生の発想力をフルに使った結果、その2体目の埴輪を作ったんですけど、元の1体目を壊して2体目とすり替えるかというような話をしていました。

おか：あらま。

河原：でも藤浩志さんが作ったことが発覚して、壊すのはまずいになって。

おか：そらあかんわ。

河原：それから昔池の中に立っていたことを知って、それなら池の中に2体一緒に入れて……と、いろいろな流れがあって最後にこうなりましたが、芸祭の時に池の中に入った学生が沈めたまま、誰も見つけられなくなってしまつて。京芸はもうすぐ移転するんですけど、そのまま埴輪も忘れ去られて行くのかなと思ひます。

留学

河原：実は私大学にあまり行っていないくて。

おか：大学に行っていない？コロナの影響ですか？

河原：そうですね、後半はコロナの影響と、あと留学もしていたので。院の時はもうほんとに半年……。

おか：どちらに留学していたんですか？

河原：ポーランドに行っていました。

おか：それはアート、芸術の勉強で行ったんですか？

河原：そうです。大学の交換留学ですね。

おか：京芸とポーランドの大学に違いはありましたか？

河原：一番は授業形態ですね。京芸は専攻に分かれてその先生と相談して作るんですけど、その相談も学期につき2回ぐらい先生と面談するぐらいで、1週間に1回ゼミがあるって感じですね。

おか：1週間に1回？あとはどうしているんですか？

河原：家で制作していました。逆にポーランドはすごく手厚くて、毎週色々な先生と相談させてもらっていました。

おか：まったく形態が違うわけですね。

河原：そうですね。

おか：自分にはどっちが合っていました？

河原：どちらも好きでしたけど、やっぱり人と話すこと

が好きなので、もっといっぱい大学に行きたかったという気持ちはありますね。でも京芸時代は長かったから、積みも積もって色々ありましたけれど。

おか：ポーランドの学生さんの作品のクオリティはどうですか？

河原：英語で授業を受けられる大学だったので、色んな国の人たちがいて、作品も色々あってすごくおもしろかったですね。

おか：色々な経験を経て作品が生まれてきたんですね。それではその作品のご紹介をよろしくお願ひします。

河原：これは私が今回 A-Lab で展示している「青い城」という映画なんですけど、映画と一緒に背景画やパネルとかその空間を作ったインスタレーションの画像です。

おか：私も拝見させて頂きましたが、非常にロマンティックな印象でした。映画はどういった内容ですか？

河原：ポーランドに留学し始めた時から作り始めたのですが、「ワルシャワの人魚伝説」というポーランドのおとぎ話がありまして、その人魚伝説と「青い城」というルーシー・モード・モンゴメリが書いた小説があって、その2つの物語とさらに自分の関心があった女性の問題をパズルのように組み合わせて物語を作りました。手法は切り絵アニメーションという、ロシアとか中東欧とかの昔の共産主義時代の時にすごく発展していたアニメーション文化から影響を受けて、切り絵アニメーションを使っています。

おか：これは紙に水彩ですね。

河原：はい。水彩画です。

おか：自分が見てきた場所、記憶から紡いでいったというか……。今回のインスタレーションは、あまり日本の香りがしないというか、独特のある種おとぎ話の世界、部屋に足を踏み入れた途端に異空間が存在するような感じがしました。そして河原さん自身もそのままのイメージのアーティストさんだと思います。だから全然違和感がないですね。アーティストさんからはっきり作品が滲み出ているというのなかなか珍しいのかなという気がします。制作にはどれぐらいの時間を要したんですか？

河原：これは1年半かかりました。

おか：あのインスタレーションも含めてですね。

河原：そうですね。

おか：発表は卒展で発表されたんですか？

河原：そうです。そこで初めて発表しました。

おか：周りからはどんな感想がありましたか？

河原：何回も観たって言ってくれる人が結構いました。私は一番好きな映画はもう何回も観ているんですけど、映像作品を何回も観るって結構難しいことで、そうさせることって難しいことだなんて思うので、やっぱりすごく嬉しかったです。自分の映画の中で疑問に持っていたことを考えながら作っていたんですけど、人に観てもらって色んな角度からたくさんの方が感想を言ってくれるので、あっ、それはこういうことだったのか、という気づきがいっぱいあって、それが一番良かったですね。

おか：作品から受ける、自分自身では気づけなかったことを観ていただいた方が気付いて色々話をしてくれて、これからの作品の糧になりますよね。

河原：そうですね。

おか：A-Lab の話を聞いた時はどうでしたか？

河原：卒展が終わってから何も予定が無く、これからどうしようかなと思っていたところでした。またもう一度展示をさせてもらえて、色んな人がまた見てくださる機会がすぐにいただけたことが一番嬉しかったです。

おか：そう言っていたら、我々も嬉しい限りです。河原さんありがとうございました。

河原：ありがとうございました。

おか：次は鈴木大晴さんです。ガラッと雰囲気が変わりますね。どちらの大学でしょうか？

鈴木大晴さん（以下：鈴木）：京都精華大学に行っていました。

おか：京都精華大学ですね。私、実は客員教授をさせていただいておりまして、作品も拝見いたしました。まずは大学の画像ですが、ものすごい雑然としていますが、これは何ですか？

鈴木：学祭の実行委員をやっていたので、5日間ぐらい泊まり込みですと準備していました。僕は写っていないんですけどその時の教室の写真です。

おか：ちょっと待ってください。これ人いますか？

鈴木：ここでみんな寝ていました。5人くらいいます。



おか：一種の現場ですね。すごいなあ。これは学祭に使うものとかがここにあるわけですね。

鈴木：あとはみんなの荷物とか服とか。忙しかったからぐちゃぐちゃになっている状態ですね。

おか：これは何時ごろですか？

鈴木：多分朝の3時ぐらいです。

おか：最後は何時ぐらいまでやっていたんですか？

鈴木：5日間ぐらいは、みんな1日2時間ぐらいしか寝てなかったですね。

おか：まだ若いからできることですよ。

鈴木：若いからできたかもしれないですね。

織の姿

おか：続いての写真をお願いします。これは？

鈴木：僕が織をしている時の後ろ姿です。

おか：すごい大きな作品じゃないですか。手がけている作品は今回の？

鈴木：そうですね。ロビーで展示している作品を作っている時の様子です。

おか：織機もめちゃくちゃ大きいですね。

鈴木：すごい大きいです。



おか：ちなみにこれで完成までどれくらいの時間がかかるんですか？

鈴木：丸一ヶ月ぐらいはかかります。

おか：そうすると糸の量もその分かなりの量を使っているということですか？

鈴木：すごく使いますね。

おか：何 kg ぐらい使うんですか？

鈴木：7 kg ぐらい使います。

おか：7 kg ！？すごいですね。展示する時も作品自体重くなりますよね。作品は拝見しましたが非常にカラフルで何色も使われていますよね。大学を卒業したらなかなかこういう大きな設備では制作できない問題があるから、大変ではないですか？

鈴木：そうですね、今は自宅に織機を置いています。

おか：どれくらいの大きさの？

鈴木：大学の織機が横幅2mですけど、僕の家にいるのが150cmですね。

おか：結構大きなものを持っていますね。

鈴木：部屋がほとんど埋まるぐらいの大きさです。

おか：それが自動的に自分の作品のサイズになりますもんね。ちなみにテキスタイルを卒業した人たちは、みなさん家に織機を持っているんですか？

鈴木：かなり少ないですけど、何人かいますね。

おか：本気度が伝わってきますね。続いての写真をお願いします。これが今回展示している作品ですね。さっき織っていたものがこうなったってことですか？

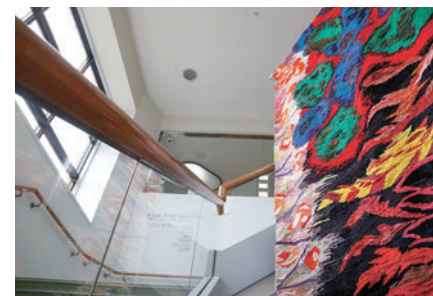
鈴木：そうですね。

おか：すごく密というか、いろんな色が混ざっている形ですね。上の方は赤や緑があって、何を表現しているんでしょうか？

鈴木：2020年の7月ごろに作った作品で、コロナウイルスをモチーフにしました。上の溜まっている丸い部分がコロナウイルスをイメージしています。当時大学にほとんど入れない状態で、制作がほとんど止まってしまっていて。すごい心が病んでいたというか、めちゃ怒っていたんですよ。

おか：怒っていた？

鈴木：なんでやねんみたいな。そういう気持ちや、本当



に死んでしまうかもしれないみたいなことを思って、作りました。

おか：僕がちょうど卒展を拝見した時には、版画も勉強されていたよね。なぜ勉強されたのですか？

鈴木：僕はテキスタイルを専攻していたんですけど、大学のゼミが他のコースも専攻できることになっていて、版画を扱ってみたいだったので作らせてもらいました。

おか：織の仕事にもプラスになることはありましたか？

鈴木：ちゃんと版をつくって彫る版画ではなく、版に直接画材をのせて、瞬発的に描く手法をやっていました。それが線の動きとか瞬発的に色を選ぶということとして織にも反映されました。

おか：そこから作品が変わってきたりしているのだと思うのですが、僕はこのようなテキスタイルの荒々しい作品というのはあまり見たことがなかったので、非常に斬新な印象がありました。下の（エントランス展示）ような、大作が多いじゃないですか。「なんでやねん」と思うところが大作を作る方向性に反映された感じですか？

鈴木：そうですね。どうせなら一生残るものというか、捨てられないものを作りたいなって思っていたので。大きすぎるので、捨てるに捨てられないかなって。

おか：保管するのも大変ですよ。2階の受付前のロビーにも作品が展示されています。これは3部作ですか？

鈴木：ばらばらですね。これまでの展示ではほとんど、織の裏地というのを見せることができてなくて、今回はそういう部分も。テキスタイルの世界では、裏地を見せることがNGなところもあるんです。

おか：ダメなんですか？

鈴木：裏に布を貼って隠したりします。



おか：どういう理由で見せないのでしょうか？

鈴木：織をやっている人は、織の裏地は糸が出ていて汚いと思う人が多いらしいです。僕はあまりそうだとは思わなくて、すごく面白いなと思っているので。

おか：制作するときにはそれは意識してやるんですか？

鈴木：それは全く意識しないでやりますね。

おか：意識しないで制作して、今見せていただいているような形の作品にでき上がっているということですね。

鈴木：そうですね。

おか：確かに面白いですね。表裏一体、一つの作品として見て頂きたいという。卒展で学長賞をお取りになりましたが、嬉しかったですか？

鈴木：すごくびっくりしました。

おか：学長から何かお言葉はありましたか？

鈴木：初めて見に来てくださった時にたくさん喋ったら、すごい共感していただけました。

おか：やっぱり学長賞を貰ったら自信つくわね。

鈴木：いや、あんまり何も変わらなかったです。

おか：そのあと京都で個展も開催されましたよね。僕も拝見しました。

鈴木：思っていたより人が来てくれました。でも学長賞取ったのは結構影響があったのかもかもしれませんね。

おか：それも糧になって、これからテキスタイル、版画でアーティストとしてやっていこうという姿勢が個展の時に見受けられるところがあって、すごく勇気づけられました。A-Labの話が来た時はどうでしたか？

鈴木：京都以外で展示してみたいと思っていたので、それで尼崎で展示できるのがすごく嬉しかったです。

おか：大学や院を修了しているメンバーと一緒に展示するのは刺激がありますか？

鈴木：すごく刺激ありますね。

おか：今回は、エントランスと、階段を上ってきたロビーにも作品があるという、位置的にも絶対にみなさんの目に入る場所ですからね。

鈴木：そうですね。空中に吊るすっていうのは、やってみたかったの。

おか：大学の時やギャラリーでは下に敷いていたけど、空間に吊るす展示はなかったんですね。

鈴木：天井はそこまで高いところは減多にないので、せっかくやったらやりたかったの、階段上がりながら作品見れるってすごい面白いなと。

おか：撮影するのにもすごく面白い。裏も見れるし、吊っているから上の部分も見れる。卒業して初めての見せ方、展示の仕方がA-Labで一つ経験できたっていうことはありますよね。貴重なお話が聞けました。ありがとうございました。

おか：続いて、藤本純輝さんです。

藤本純輝さん（以下：藤本）：お願いします。

おか：藤本さんの作品は、今年だけで多分5〜6カ所で見えています。今年は何作品ぐらい作っていますか？

藤本：もう数えてないですね。実は学部生のときから、制作のベースに関してはそんな感じです。

おか：大学はどちらでしたか？

藤本：僕は京都芸術大学です。

おか：これは作品ですか？

藤本：これは僕が使っていたアトリエの写真になります。

おか：みなさんで使っていたということですか。

藤本：そうです。この部屋は大学院の部屋で、ちょっと広いですね。

おか：院生の方々っていうのは基本的に学部の時より人数は少ないですね。何人ぐらいお使いになっていたんですか？

藤本：この部屋は手前が僕で、奥に2人でした。奥の部屋も手前の区画？と同じぐらいの大きさです。

おか：かなり広いですね。

藤本：そうですね。広く使わせていただいていた。

おか：大学院って大体こういう感じなんですか？

藤本：僕は他のところを見に行ったことがないので、ど



うかわからないんですけど、僕が勝手にこの部屋を展示もしてみようと思って使っていました。みんないろんな使い方をしていますね。

おか：院生の1回生の時から2回生の時までの作品がここににあるということですか。

藤本：人によりけりですね。僕はこの時期のものだけしか、この画像の中にはないです。

おか：この時期のものといっても、結構ありますよね。

藤本：そうなんです。全部1ヶ月以内ぐらいの作品なので、今と変わらない作り方をしています。

おか：正面に縦長の作品もありますね。院の時に全部作ったものを展示してて、しかしどこかで展覧会があるからということで作っていたものではないんですね。

藤本：そういうことです。研究でもあるし、制作の過程でもあります。自分の求めているものをひたすら出すので、量が増えていく感じです。

おか：院に行っている時に、作品に関して追求をしていくわけですね。2年間の意味はありましたか？

藤本：すごくありました。

おか：それは没頭するということなのか、それとも例えば他の院生の方々と切磋琢磨していくことですか。

藤本：どちらもあります。やっぱり学部じゃなくて院は1つのことに専念して研究できるし、同じように研究している人たちが周りにいることで、みんな切磋琢磨していけるので。

おか：その研究があって、コンセプトがあったりとか、これから構築されていくという1つの通過地点ですか。

藤本：通過地点です。

おか：いろんな場所で作品展示をしてたくさんの人が観ていると思いますが、本人としては嬉しいですか？

藤本：僕も作品を見てもらいたくていろんなところで展示をしたいなと思っているので。

おか：やっぱり作品はいろんなところで展示することによって、ここはこういう感じならこの作品が活きるのかな、やっぱりそういったことを考えるんですか？

藤本：すごく考えますね。

和室

おか：今回のA-Labでの展示は和室ですが、どういった展示をするのかなと思ってすごくワクワクしました。展示の様子を見てみましょう。展示がしっくりきすぎているというか、本当に雰囲気、展示室という感じですね。今回和室で展示してどうでしたか？



藤本：もともと和室は、作品が合う気がしていたので、いつか絶対展示してみたいと思っていたんですが、機会がなかったです。

おか：この和室を見てどうでしたか？

藤本：もう是非、という気持ちで。この和室なら絶対僕は自分のシリーズの中のこの作品を持ってきたいと思って制作しました。

おか：この和室にこの作品を選んだことに何か意味があるんですか？

藤本：意味としては、空間に合うか合わないかですね。

おか：もう一つ作品が展示されていますよね。

藤本：そうですね、奥のところに小さい作品が。

おか：この小さな作品は、2点で一つの作品になっていますね。すごくこだわっているような気がしますが、例えばキャンバス地などにこだわっていますか？



藤本：こだわっています。

おか：どういった理由で選んだりされているんですか？

藤本：僕は空間に対してもそうですけど、画面のサイズだったりモノに対してどれを選び、どれを使うかということを慎重に考えます。僕の作品は柔らかい感じなので、普通のキャンバス地だと厚みが強すぎたりして描かれた表層のものが合わないんです。それでそこに合う布を探してきたりだとか、また逆に質感が荒いものを探してきてそれを使ったりとか。

おか：表面でいうと、荒すぎるけどドンゴロス（麻布）とキャンバス地の間みたいなものですね。そして画面上では分かりにくいですが、少し引っ掻いたような感じの表現がされていますが、これはなぜ？

藤本：もともとは布を2枚重ねて使うことをずっとやっていたんです。薄い布を1枚で使うと画面の奥が透けてしまうので、それをカバーしようと思って厚い布と薄い布を合わせて使っていたんです。それがきっかけで、合わせる前に1回上の布を切ってみたらどうなるんだろうと思って、やってみたら意外といい感じで、表情が枝にに見えたんです。そこから始まっています。

おか：自分がそういう表現をしたかったのではなく、どちらかというと支持体から生まれてきたものということですか？

藤本：そうです。追求した結果それが生まれ出たという形になります。左側の方はフェンスのようなイメージで、切っているんですけど右側の方は彫っているんです。

おか：これは彫っているんですか？

藤本：はい。それは追求の形で出てきた表現というか表情というか。

おか：作品のサイズや展示する空間によって色々変え

ていたりしているんですね。今回左の作品はすごく情報量が多い方だと思います。それから非常に情報量が少ない作品、シャシャッと描くような作品もあると思いますが、あのような作品はたくさん作品を作った中の一部みたいな感じですか？アーティストさんの中には、10枚ぐらい並べて作られる方とかもいらっしゃるみたいですが、そういうやり方とは異なりますか？

藤本：僕は1枚の絵に対して毎回集中して描いているので、副産物的にできるわけではないですね。

おか：今回の作品は展示場所をイメージしたものなのか、もともとある作品をここに持ってきたのかどちらなんですか？

藤本：小さい方の作品は後者の方でした。

おか：では床の間の作品は場所を見て作った？

藤本：はい。

おか：なるほど。これはもう以前からあるかのようなもんね。これはアトリエでお作りになったのですか？

藤本：そうです。

おか：現場に持ってきてピッタリはまった時の気持ちっでどうですか？

藤本：めちゃくちゃ気持ちいいですね。アトリエは雰囲気がちっと違うので。例えば天井高が違うのでアトリエだとちょっと詰まりすぎているかなって感じながらも、持ってきたらやっぱり正解だったなというようなこともあります。

おか：特にA-Labは一番奥に和室がありますし、日の入り方によって見え方が変わったりするじゃないですか。今日は晴れているからすごく明るい形で見えるけど、それが曇った時とか夕方ぐらいになって日が陰ったりすると、また見え方が変わってくるじゃないですか。その辺は和室だったら独特でももんね。

藤本：そうだと思います。

おか：見ていてすごく楽しかったですし、これからどうなっていくのかなという感じもしました。作品の点数が少ないですが、まだ展示できたんじゃないですか？

藤本：これはこれ以上やったら絶対ダメですね。

おか：絶対ダメ？

藤本：絶対ダメです。

おか：それはやっぱり空間自体と作品のバランスが壊れちゃうという？

藤本：はい。

おか：作品がまだあるのかなと思ったら、なかったのであれ？と思ったりしたんですけど、作品だけではなく、空間とのバランスのことも考えているところもあるんですね。みなさん遠目からの画では分かりにくいかなと思いますが、近くに寄って見ていただいたら本当に細かい仕事がよくわかります。これ「仕事」ですよね？



藤本：そうですね。

おか：本当に精神集中してやるような感じですね。

藤本：そうですね。それこそ先ほどの鈴木さんの作品の裏側の話じゃないですけど、僕もそういうところに面白みを感じています。

おか：これってやってみないと、どうなるか分からないわけじゃないですか。

藤本：そうですね。

おか：これに関しては深く彫ったりしていますけど、また違う彫り方をしていけば、見え方が変わってきたりとかもしますよね。それも作家としては楽しみというところですか？

藤本：そういうことです。

おか：ということは、一度頭の中で構造を描いてからこういうことをするんですか？

藤本：あまり考えないですね。いつも画面に任せてしまいうんです。

おか：委ねるということ？

藤本：僕は画面を聞いているだけなので。求められていることを。

おか：画面から求められることを聞いているだけ？

藤本：感覚としてですが。なのでモノによって結構変わったりします。

おか：面白かったです。ありがとうございました。

おか：続いて茂木山スワンさんです。

茂木山スワンさん（以下：茂木山）：よろしくお願いします。

おか：どちらの大学でしょうか？

茂木山：大阪芸術大学です。

おか：一言でいうとどんな大学ですか？

茂木山：変な人が高確率でいるというか、具体的にいうと頭にポケモンを乗せている人がいます。

おか：頭にポケモンを乗せている？

茂木山：言葉の通りポケモンを乗せている人が歩いたりします。



おか：この人は、ずっとこれをしているんですか？

茂木山：そうです。この場所をよく通っているんですよ。

おか：この人は学生さんですよね？聞いたことはあるんですか？

茂木山：学生で同い年だと思います。友達が話しかけたそうですが、とても早口で何かを言っていたそうです。おか：でもアーティストとか芸術家の方って、人と違うことをしなさいとかよく言いますが、そういう意味でいうと1つのパフォーマンスですからね。通学時もこれしていたらすごいですけどね。

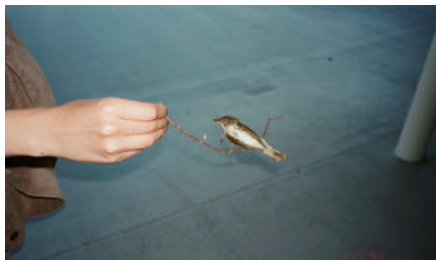
茂木山：そうですね。貫き通して欲しいです。

おか：この空間が面白いですよね。次は何かありますか？

茂木山：これはスズメが亡くなっていて、それを埋葬するときの写真です。

おか：大阪芸大ってそんな儀式があるんですか？

茂木山：儀式を勝手にしました。アスファルトの上に落ちていたスズメを枝に乗せて。ちょっと素手で触ると申し訳ないと思って。



おか：大学には、生き物や鳥はよく来たりしますか？

茂木山：山の上にあるので四季折々の鳥はいます。

おか：スズメをそういう風に埋葬するのをあんまり見たことないので、なかなか珍しいですね。

茂木山：そうですね。

おか：埋葬は一人で行ったんですか？

茂木山：友達とです。写っているのは友達の手です。

おか：これはちゃんと埋めてあげた？

茂木山：埋めてあげました。

おか：それは今何が役に立っていますか？

茂木山：ないですね。

おか：ないですか（笑）。でもスズメを見たときに思い出したりとかしますからね。次はどんな写真でしようか。

茂木山：これが埋葬完了の図です。お花も差してあげました。

おか：すごいなあ。これは大学内ですか？

茂木山：はい、大学の裏側にある山です。

おか：あのひっそりとしたところですよ。面白いですね、いきなりスズメが出てくるとは思いませんでした。

写真

おか：次のお写真は何かありますか？フィルムですか？

茂木山：そうです。これは暗室で TypeC プリントをしている時です。

おか：学部は何学部？

茂木山：芸術学部の写真学科です。



おか：暗室はもともと真っ暗なんですよ。

茂木山：そうです。カラープリントをする場合、光を一切残してはいけなくて蛍光灯を消した後も光が残るので完全に暗くなるまで待ちます。これはコンタクトシートを作っているときの図です。

おか：写真というのはこの工程があって、次何に行くんですって？

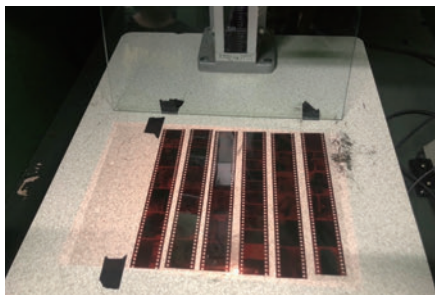
茂木山：印画紙に光を当てて、それから化学処理をして出します。

おか：やっぱり大学で勉強していくうちに写真の魅力に取り憑かれていったんですか？

茂木山：そうですね。私はスナップ撮影が好きで、道端に落ちている異様に感じたものとかをよく撮っちゃうんですけど、その場やその時間にしかない瞬間というか。

おか：瞬間を切り取るということですか。

茂木山：なんかありきたりな言葉になっちゃうんですけど、そうですね。



おか：写真をされる方は、小さい頃からカメラを持って写真撮影をしていたその延長線上にあるのか、何か表現したいから写真を選んだのかどっちになるんですか？

茂木山：私は延長線上ですね。

おか：ということは昔から写真は撮っていた？

茂木山：小学生の頃からデジカメで撮っていました。

おか：例えば遠足に行ったりどこか旅行に行ったりしたときに写真を撮ったりとか？

茂木山：そうですね。

おか：それは風景とかですか？

茂木山：風景もですが中学生になると友達もよく撮っていました。高校生になると「写真」を撮ろうと思いました。

おか：それまでの自分の撮り方とかは、写真を勉強していくとやっぱり全然違ってくると思うのですが、大きく違う点って何ですか？

茂木山：写真の教育というものを受けてから変わりましたね。シャッターを押してブレずに写っていればいいだけではないと。例えば過去の写真家、アンリ・カルティエ＝ブレッソンとかそういう名だたる写真家の写真を知ってから、それがベースになりました。

おか：今までは自分が好きなものを撮っていた？

茂木山：はい。

おか：でもそれがアンリ・カルティエ＝ブレッソンとか有名な写真家の作品を見て「こういう撮り方をしているんだ」というところから勉強って始まるんですか？

茂木山：そうです。感性を刺激されます。

おか：そこから次が技術ですか？

茂木山：習字の崩した文字のようなものを感じます。

おか：暗室で現像するとき、驚きはありますか？

茂木山：印画紙を感光したした後、化学処理ができる現像機に入れて待っていると紙が出てきて、像が出てきた！みたいな感じですね。

おか：自分が思った通りに現像できる時と、全く違う方向になってしまう時もあるんですか？

茂木山：ありますね。カラープリントだとどれくらいの色が欲しいかとか数値の数メモリで結構写真の色味が変わってくるので、カラー写真って楽しいなと思います。

おか：今回の展示は少し薄暗い部屋の中で作品を展示されていますが、これはどういった作品になるんですか？

茂木山：今回はコラージュで制作して、長く丸い空間を自分の頭の中とつなげたような作品になっています。

おか：入口にシルバーのすだれみたいなものは何のイメージですか？

茂木山：何かしらを祝っているパーティー会場をイメージしました。

おか：ここからパーティーが始まるという感じですか？

茂木山：そんな感じです。できるだけチープにしたい。高級ホテルで行われるパーティーではなく体育館で行うブロムやホームパーティです。

おか：なるほど。最初は、何でこういう風にしているのかと思っていて分からなかったのですが、今お聞きして分かりました。コラージュされたこういう作品の表現で入口にシルバーのすだれがあることによって、遊び心といいですか、写真の作品ということだけじゃなくて、入口にチープなものがあることで一つの空間自体の見え方が変わりますよね。ここで展示してどうでしたか？

茂木山：階段付きの元倉庫が展示場所だったんですけど、一階と二階の空間を分断することができて良い場所でした。あの写真は私のゼミの先生と、わんちゃんをコラージュしたものです。お世話になったので、是非とも入口の特等席に。

おか：今回の展示をインスタグラムにあげている人が結構いらっしやるんです。スワンさんの作品が一枚目にあったりとか、すごく印象に残るんですね、遠隔で奥に作品があったり。だから今回のこの長細い部屋というのは正解だったような気がします。面白いです。

茂木山：嬉しいですね。

おか：なかなか大学時代はこういった形の展示はできなかったんですか？

茂木山：こんなに自由に使える壁はありませんでした。

おか：今回こういう新たな挑戦的な形の作品があって良かったですね。この蛍光灯を下にやっているのもご自分でお考えになったんですか？

茂木山：はい、暗闇でぼんやりと光る色が欲しくて。イメージ的に青い蛍光灯が天国みたいな。

おか：画面上では分かりにくいですけど、もっと実際は暗いんですね。天国？

茂木山：青い天国です。

おか：青い天国？ということは反対もあるんですか？

茂木山：下が赤い蛍光灯だからといって地獄ではないんですけど、「クリスマスの鶏予約中」と書いて丸焼きのお肉がある下に優雅に泳いでいるダックが傍観しているという感じです。

おか：地獄ではないけどもダークな世界ですよ。ユートピアとディストピアみたいなイメージで。今まで写真でそういう表現ってされていないんですか？

茂木山：ないですね。やって見たいです。

おか：表現が合っているかわかりませんが昔のB級映画を見ているような印象が頭の中に浮かんできて楽しめました。ありがとうございます。

おか：山下茜里さんお願いします。山下さんの作品は精華の時からずっと拝見させて頂いています。

山下茜里さん（以下：山下）：ありがとうございます。

おか：精華大学では何を学んでいたんでしょうか？

山下：テキスタイルコースで主に私は「蠟染め」という技法で作品を制作していました。

おか：どういった技法ですか？

山下：例えば白い布の上に蠟燭の蠟で丸を描いて、上から赤い染料で染めたらその丸く描いた所だけが白く残るという技法で、染まらない部分を作って作品を制作していきます。絵画とは逆ですね。描く部分を筆で描くわけではなくて、色が乗らない部分、1つ前の色を残す、みたいなのですと逆算して作品を作っていきます。

おか：それを院までずっと？

山下：そうですね。院までずっとやっていました。この写真は、精華大学のギャラリーフロールでの展示で、大学院1回生の時に作った作品ですね。

おか：これは何を表現しているんですか？



山下：大学院に入ってから主にこういう赤い人間のシリーズを作り始めています。各々のパネルの中に閉じこもっているようなイメージのものを5体展示して、その中に鑑賞者の方が入るという作品です。

おか：眼だけがチラッと開いていたりして独特ですね。

山下：そうですね。きっとおかさんに見て頂いたことのある作品は、眼だけの作品とかもっとカラフルなものが多かったと思いますが、大学院に入ってから赤いシリーズが多いです。

おか：何かきっかけがあったんですか？

山下：大学4回生で最後にいろいろな眼の作品をインスタレーションで大学に展示した後に、大学院に進む2年間で、もう少し違う表現が出来ないかなと思って、次は人体を取り入れてみようと考えました。

おか：一つの作品の流れとしてあると思いますが、表現の仕方が変わりましたね。

山下：線1本1本のストロークも、大学院に入ったら1個に変わってきた感じはします。

制作環境

山下：これは去年の4月あたりの個展の写真です。

おか：これは先ほどの作品の延長線上にある？

山下：そうですね。延長線上のもので、さっきのが大人なイメージなんですけど、こっちはもうちょっと子どものイメージで作っています。71体この空間にありますが、これも鑑賞者を囲うように展示しています。本来作品は人が見る側で、作品が見られる側だと思うのですが、逆転したものを作りたいというのがありました。

おか：鑑賞者が見られるという感じ？



山下：そうです。入った瞬間に見られている意識を鑑賞者ももつのではないだろうかと思いながら作ったものです。また、これがちょうど1回目の緊急事態宣言の同時期に開催をしていました。大学が閉まると決まったのが搬入の1週間前で、その日の夕方頃に明日から閉まりますと言われ、大学に全部この71体がいたので急遽下宿に71体全部トラックで運んで持って行ったという思い出があります。

おか：これ全部持って行ったら部屋が…

山下：この子達と一緒に1週間過ごしていましたね。

おか：ちなみに何畳ぐらいの部屋なんですか？

山下：10畳ぐらいのお部屋です。

おか：これ全部持って行ったらほとんど…

山下：そうですね。囲まれていました。見られながら生活していましたね。

おか：自分で制作して鑑賞者に見られるはずが自分が見られていた。

山下：そうですね。梱包する間も無かったので見られながら1週間生活していましたね。運び込む時もトラックから出してマンションの入り口に立て掛けてました。その時は夜に1個1個エレベーターで運んでいて色んな人通るので、ごめんなさいって思いながら。

おか：でも面白い経験でしたね。

山下：そうですね、良い経験だったと思います。去年の9月にも個展がありましたが、その時に初めて立体の作品を作りました。

これに至っては大学では作ってなくて、実家の4畳ぐらいの部屋ですと制作していました。

おか：大きさはどのくらいあるんですか？



山下：最終的にこれは250×250×150（cm）ぐらいの立体です。眼の形をいっぱい染めて縫い合わせて、中に大きい風船を入れて膨らます形状にしています。最後は4畳の部屋では膨らませられないので、実家のリビングのみんなでご飯食べる所を端っこに寄ってもらって、みんなでご飯を食べている真後ろにずっといました。

おか：ご家族はなんとおっしゃっていましたか？

山下：みんな温かく（笑）。

おか：なるほど。これはすごい作品ですね。続いては？

山下：大学院の1回生の時に展示した5体の作品の制作途中ですね。こういうところで私は制作をしていました。

おか：これは実際どういう作業をするんですか？

山下：これは染めているところですね。染める作業をしているんですけど木枠に布を張ったり、ボールとボールの間に布を張って染めていくようなところで。

おか：奥にあるのはかなり大きいですね。

山下：そうですね。2m50cmの作品が2枚並べて張ることができるので、大学では広いスペースを使わせていただいていた。下宿を引き払って、今は8畳ぐらいの部屋で作品を制作していますが、大学院の修了制作展に出した作品も8畳の部屋で作っています。

おか：今ちょうど後ろにドーンと眼がありますけど、めちゃくちゃでかいですからね。

山下：これも大学が閉まっていたので、4畳の部屋では作れないから8畳の部屋で2m×2mの布を1枚ずつ染めて縫い合わせました。布の良いところは、縫い合わせることができるので、縫い合わせて9m50cmぐらいの作品を作りました。

おか：何回縫い合わせているんですか？



山下：4回縫い合わせて5枚で1つの作品になっています。私がこの作品を引きで観ることができたのも修了制作展の時が最初で最後でした。

おか：なるほど。ずっと「眼」ですよね。どうしてそこまで眼に執着するのかなと気になります。

山下：人の目に映り込むという現象にずっと興味がありました。今私がおかさんと喋っている時、私の目にはおかさんが映っていて、おかさんの目には私が映っているんですけど、他の体の部位のどこでもそういうことは絶対に起きなくて。

おか：映り込むということは起きないですね。

山下：王道のモチーフだけど突き詰め続けたら自分のものになっていくのかなというもあってずっと眼の作品を作っていますね。

おか：一目で見て山下さんの作品というのはわかりますからね。これもすごいですね。

山下：これまでカラフルなものだったり、赤いものが多かったんですけど、最後に何をやっていなかったかなと思ったらモノクロの作品は作っていないなと思って。初めはやっていないことをやりたいというところから始まったんですけど、さすがにそれだけの理由で大きいものを作るモチベーションをどうしていこうと思って。色のある眼が人を映す眼だとしたら色のない眼は人を映さない眼として作ろうと。なので人が映らないということはどう表現したらいいだろうと思った時に、鏡は割れると乱反射で目の前のものを映さなくなることに着目して、眼自体を割る、割れているような表現になりました。

おか：これは制作している途中からそういうものが生まれてきたんですか？

山下：そうですね。作りながらどういうポジションの作品、シリーズにしていこうかなと考えながら作っていくという感じです。

おか：これでまた1つ違う作品が生まれたということですよ。

山下：そうですね。これでまた次に割れた眼のシリーズを作っていけたらいいなと思っています。

おか：またこれから楽しみにしたいと思います。山下茜里さんでした。ありがとうございました。

おか：今回もう一人鐵羅佑さんがおられるのですが、お休みのため代わりに作品をご説明されている映像があります。

(インタビュー映像から抜粋)

・自己紹介

鐵羅佑です。これまでは金属彫刻を中心に制作してきました。溶接痕に魅力を感じて作品の中に取り入れるようになり、重量感のある作品制作を主にやってきています。

・A-Lab Artist Gateに参加することについて

こういう展覧会は初めてなので他の作家さんと一緒に設営しながら学べたらと思いつつ、これを足がかりにこれからどんどん展覧会をやっていききたいと思います。

・今回の作品について

大学の卒業制作で制作した、およそ全長10mのサンショウウオから足を切り取って、建造物をイメージしたものに再構築をしたものです。扱ったテーマはコロナウイルスでの生活や、芸術を表現する場所の問題点です。その時の問題はずっと今もズルズルと引き継がれていて、それがもっと日常に潜んでいるのを表現したくて、ちょっと不気味な形を目指して作りました。

・今後の活動

公募にも出していきたいです。大きい作品を作りたい、鉄という素材を扱っているので、野外彫刻にも挑戦していきたいと思っています。



鐵羅佑さん

おか：先程ちらっと出りましたが大学時代にはターニングポイントというものが必ずあります。ターニングポイントをお聞きしまして作品の意図であるとか、どういう変化をもたらしたのかということをお聞きしてみました。それでは河原さんからお願いいたします。



河原雪花さん

憧れ

河原：青い城の映画がターニングポイントになっているので、その作り始めた元になっているポーランドです。

おか：何か出来事や感じたことで思い出すことはありますか？

河原：そうですね。チェコも影響が大きいです。人形劇が大好きで、ポーランドに留学していた間にチェコにもたくさん行って人形劇の鑑賞に行きました。切り絵もすごく好きで、命のないものが動き出してそれが魔法みたいに感じるような感動があります。

おか：人形劇ってすごいですもんね。僕らが小学生の時に見た人形劇とは違って、今は人の半分くらいの大きさのものを操ったりしますよね。

河原：そうですね。大きいものもあったりしますね。

おか：10mくらいの大きなものもありますよね。そういうものもご覧になられましたか？

河原：大きいものはいつか見たいと思っているんですけど、小さいものとか伝統的なものとか昔のものとかずっと続いているので、そこを実際に見に行けたことが一番良かったかなって思いますね。

おか：それは人形劇の世界観ですか？ちょうど今展示されているインスタレーションなんかでも非常にファンタジー的なところもありますし、人形劇ってそういうものだったりするからね。

河原：ファンタジー的なところもすごく好きなんですけど、怖さとか切なさをすごく大事にしている。楽しい場面なのに悲しい音楽が流れているとか、そういったものに心動かされるので自分の作品もそういったものを大事

にしています。

おか：世界観的にいえば、人形劇から映像アニメーション的な部分って繋がっていますよね。

河原：やり方としては人形劇と同じような感じですね。

おか：展示の中では建物の書き割りをつくったりしていますが、そのまま人形劇に出てきそうな雰囲気もします。チェコで見た人形劇がインプットされていて、それが表現につながっている部分もあるんですか？

河原：そうですね。ずっと憧れていたもので、特にポーランドは大学が交換留学をしていたというのが理由ですけど、チェコもずっと憧れていたもので、実際にその場所に住めたことが一番大きかったなと思います。

おか：チェコは一度行ったらもう1回行きたいってみなさん言いますよ。

河原：歴史的にすごく魅力がありますね。やっぱり黒いところがあるので…

おか：そういう部分をこれから引き出して作品表現をしたいというところがあるんですか？

河原：過去の作品を出し忘れていましたが、チェコのおとぎ話から着想を得て自分の物語にした映像を作ったりもしています。その中でずっと海の向こうの国のことを見ていたので、帰ってきてからは日本の方を見つめていて。新作は日本を舞台というか、日本の自分が気になる所を映画の中で考えていくのかなと思います。

おか：海の向こうという表現がいいですね。すごくおとぎ話的な言葉の表現だなと思いました。ありがとうございました。



鈴木大晴さん

下宿

おか：続いては鈴木大晴さんよろしくお願いします。ターニングポイントは一体何でしょうか。

鈴木：下宿です。

おか：下宿がターニングポイント？実家という家は？

鈴木：実家も大学も京都で、通える距離ではあったんですが、大学2年から下宿することにしました。

おか：何か理由があるんですか？

鈴木：みんなで暮らしているのに、夜中にガザゴンすることが出来なくて。一人で夜中に音楽を聞いたりしたかったので、どうしても住みたくて。授業が忙しいことを親に言ってみたら下宿できることになりました。

おか：やっぱり変わりましたか？

鈴木：一人で全部やるようになったことと、圧倒的に人と会話する時間が減りました。考える時間が増えてからすごい作品もグッと良くなりました。

おか：どんな部屋だったんですか？

鈴木：普通のアパートの6畳でした。

おか：大学で制作してきたものだと6畳ではかなり狭くないですか？

鈴木：そうですね。今は違うところに住んでいますが、4年からは大学に入れない時期があったので、織機をいただいで6畳の部屋に置いていました。布団を敷く場所がなくて、毎日織機の下に布団を敷いて寝ていました。

おか：ものすごい窮屈じゃないですか？

鈴木：頭の上に作りかけの作品がずっとある状態でした。

おか：でもそれがやっぱり楽しかったんですね。ある意味作品とじっくり向き合えるというか。

鈴木：そうですね。

おか：面白いですね。そういう学生さんがいるというのは僕も嬉しい限りですよ。ありがとうございました。

覚悟



藤本純輝さん

おか：続いて藤本純輝さんお願いします。藤本さんのターニングポイントを教えてください。

藤本：「武装解除」です。

おか：何があったんですか？

藤本：今の作品になるまでは、一言で言えばありきたりな作品を作っていたと思います。どこかで見たことがあるようなものがかっこいいなと思い、誰かの作品っぽいものとか、ゴツゴツとしていたり激しかったりとか全く今の作品とは違うことをしていました。そんな時に、作家としてどうなりたいかと考えたら、自分にしかできないものを作っていきたいというのがありました。そのためには今まで憧れで作っていた部分を全部捨てなきゃいけないなと思い、かっこつけている部分を全部捨てました。ほんとに自分のものしかないような状態まで落とし込んでいった、それが武装解除かなと思っています。

おか：なるほど。それから支持体と向き合うようになったということですか？

藤本：そうなってきましたね。僕自身、性格というか人が多丁寧な人だと思うんです。それなら丁寧な表現をしなくちゃダメだろう、と思いました。そこからずっと支持体に向き合ったりとか作品の作り方も丁寧とか、絵の具の置く場所、配置だったり空間に関してもうすごく丁寧に行うようになって、今の感じになりました。

おか：この武装解除は何回生の時ですか？

藤本：これが学部から院に上がる時ぐらいですね。

おか：ということは大学時代と院の作品というのはちょっとイメージが違う感じですか？

藤本：そうです。多分テーマとして気になっているところは一緒なんですけど、ただもう表層の見え方は全く違いますね。

おか：例えば僕なんか過去の漫才の自分のVTR見たらちょっと気恥ずかしいような気持ちになるんですが、過去の自分の作品を見てどういう気持ちですか？

藤本：基本的にはどれも好きなんです。これはこれでいいなと思うけど、プロとしてやっていくにはこれじゃちょっとただの趣味みたいだなという。

おか：真似事みたいところがあるっていう、形のものがあるというね。自分の展覧会をやった時なんかそう



茂木山スワンさん

いう作品もあったらこうやって変わっていったあってというような所もこれから先なんかあったら見え方的にそういうのも面白いかもしれませんね。過去の作品もまたよかったら見せてください。ありがとうございました。

創造

おか：さあ続いて行きましょう。茂木山スワンさんお願いします。ターニングポイントは一体何でしょうか？

茂木山：ガイアです。

おか：ガイア？

茂木山：ギリシャ神話に出てくる大地の神ですね。

おか：ギリシャ神話？これはどうしてですか？

茂木山：ガイアは混沌（カオス）から生まれてガイアからこの世のいろんなものが生まれてきたんです。

おか：そういうところから天国とかそういうイメージがあったりとか、ディストピアとユートピアじゃないけどそういう世界観のきっかけですか？

茂木山：そうですね。混沌な作品を作りたい。情報量が多いのが好きなんですよ。

おか：例えば壁画とかいっぱい情報量があるじゃないですか。情報量の多いものを写真の中に取り込んで、一旦自分の中で整理して、インスタレーション的な作品になるということですね。だからそれが1枚の作品としてではなく、展示した時にガイアというターニングポイント的な部分が表現に出てきたという。何回生の頃ですか？

茂木山：3年生ぐらいにギリシャ神話の図鑑みたいな本を読んだんです。

おか：それを見て感動したということですか？

茂木山：ウケるって思いましたね。

おか：ウケる！？ギリシャ神話ウケますか？

茂木山：はい。

おか：ウケるというのは面白い、滑稽な面白さとかそういう意味ですね。ギリシャ神話の捉え方も面白いですね。色んな神々がいるじゃないですか。そういうのを見ていてやっぱり楽しかったですか？

茂木山：楽しいですね。

おか：作家さんから出てくるイメージが、ストレートに伝わってきます。ありがとうございます。

出会い

おか：続いては山下茜里さんお願いします。ターニングポイントは何かですか？

山下：「どこかのワークショップ」です。

おか：どこかのワークショップ？

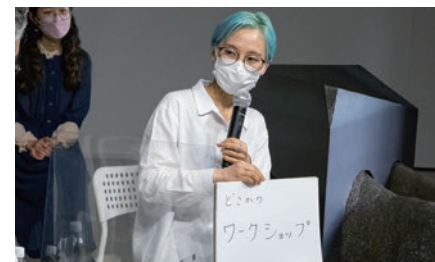
山下：おそらくどこかの大学のオープンキャンパスで受けたワークショップだったと思うんですけど、制作ですっど使っている道具をその時に初めて使ったんです。

おか：高校生の時？

山下：そうです。高校生の時に受験のために行った大学でその道具を使ってワークショップを受けたんです。

おか：その頃からテキスタイルを専攻しようと思っていたわけですね。そういう道具は見たことがなかった？

山下：全然見たことがなくて、その道具を使って繻染めの簡単なワークショップを受けたんです。それから大学に入って、2回生の最後の課題が自由課題だったんです。その時に何をしようかな、どんな技法を使おうかなという時に、そのワークショップで使った道具が面白いなと思って。ただ大学ではその道具を使った授業をしていないんですよ。だから先生に相談して、その道具を1個買っ



山下茜里さん

て使い始めたものを今もずっと使っています。

おか：1、2回生のその時は使おうとは思わなかったんですか？

山下：1回生と2回生の間は、色んな技法を学ぶ技法研究の期間として決まっていたんですね。織の時間、染の時間、縫の時間というのが決まっています。2回生の最後の授業で今まで学んできたものの中でどれがしたい？って言われた時に、結局今まで学んで来なかったことをしたいと思ったんですね。

おか：先生にしてみたらそこ！？っていうところもあったでしょうね。

山下：そうですね。でも蠟の先生も、じゃあこの道具だったらこういう使い方ができるんじゃない？って親身に考えて下さって。そこから今の作品に繋がっています。

おか：ありがとうございました。みなさんそれぞれターニングポイントがあり、作品の方向性が決まったりとか、道具を持つことによってまた新しいものが生まれてきたりとかがあるんですね。最初は大学や作品を見て頂いて、ターニングポイント、こういった形で大学時代に作品の方向性が決まってくるという話を聞きました。

おか：最後は、アーティストの皆さんにアトリエにあるものを持ってきて頂いております。それによってアーティストさんが一体どういった方なんだろうということ掘り下げていきたいと思います。それでは河原雪花さんお願いします。何でしょうか？

制作風景

河原：これは切り絵の人形のパーツです。人形を作るんですが、分けて描いて、切ってパーツにして、ファイリングして、写真を撮るときに組み合わせて使います。

おか：展示している映像になっていたものですか？

河原：そうです。これは最初のデザインで、主人公の女の子の一人ですけど、服がめんどくさすぎてやめました。

おか：笑。やめた？

河原：はい。全部360度描かないといけないから、ちょっとめんどくさいなと思ってニットにしました。

おか：やっぱり制作してから気がつくことがあるんですね。これは足元ですか？



河原：これは靴下ですね。

おか：たくさんありますね靴下。それから？

河原：これは靴です。

おか：すごいですね！これは靴の裏じゃないですか。

河原：そうですね。歩くシーンとかは靴の裏も作らないといけないので。

おか：靴の色んな角度ですよ。表面や横、ちょっと斜めだったりとか、そのシーンによって靴が違うから？

河原：そうなんです。

おか：これだけ作っているんですね。

河原：はい。いっぱい作らないといけないので。

おか：全部自分で描いて切っているんですね？

河原：そうです。

おか：すごい！背景とかもあるってことですか？

河原：そうです。背景も全部あります。

おか：これがアトリエに何冊ぐらいあるんですか？

河原：これは10冊ぐらいあると思います。

おか：その中から選んでいってやっていく、チョイスしていった衣装部屋と言うか……。これが無かったらできないですね。

河原：そうですね。トレーシングペーパー買ってきて、自分で本みたいにして。

おか：これを見てイメージする場合もあるんですか？

河原：絵コンテが全部決まっているのでそれを元にして。

おか：絵コンテもたくさんあるんじゃないですか？

河原：何回も変わりますね。もともと絵コンテも20枚くらいとかだったんですけど、作りながらどんどんお話の内容が変わっていくので、描き直しながら。

おか：これは現場の制作風景というか、こうやって制作

しているんだっていうのがわかりますね。勉強になりました。ありがとうございました。

色の表現

おか：鈴木大晴さんお願いします。一体何をお持ち頂いたんでしょうか？

鈴木：僕は糸を巻く木の棒です。織の時に、絶対に必要になるものです。

おか：どういう使い方をするんですか？

鈴木：決めた糸を巻きつけて、これを織る前に30個近く作っておきます。

おか：これを先に作っておくんですか。

鈴木：そうですね。下図に合わせた色とかその時に選んだ色の糸を、これだと4本ですけど、大体5本ぐらい入っちゃうとちょっと織の地の部分、面の部分がおかしくなっちゃうので最大で4本ぐらい使います。

おか：それで色を表現するということですか？

鈴木：例えば黄色だとしたら、大体下図の段階で黄色と決めていたらその黄色に近い糸を集めて、何種類も作ってそこで織り込んでいくという形です。

おか：例えばこの糸によってもので表現するとしたらどういうものですか？

鈴木：光とか。

おか：光？

鈴木：背景に当たる部分とか。

おか：なるほど。この糸の織り込みが光になるんですか。

鈴木：そうなんです。

おか：絵の具とはまたちょっと違う、混ざるといとか……

鈴木：そうですね。絵の具よりは色が残ります。

おか：色が1色じゃないから独特のカラーリングになっていくというのはテキスタイルの一つの魅力なのかなと思います。

鈴木：織にしかこれは多分出せない色であって、そういう表装とかであるかなと僕は思っています。

おか：展示している大作があるじゃないですか。あれだものすごい数いるんじゃないですか？

鈴木：そうです。もうすごい数ですね。

おか：100本ぐらい？

鈴木：100本では足りないぐらいですね。すごい面積が大きいので、あの作品でいうと、左端の部分が最初に全部ピンクで決めているんですよ。でも近づいてみると全くピンクじゃない色も入っていて、という感じであそこだけで多分100色ぐらいは使っていると思います。

おか：僕ら遠目から見たら2色ですもんね、赤と白っていう。それが100色使っている？

鈴木：それぐらいは使っていると思います。何百パターンって感じですかね。例えば4本黄緑が3本で、オレンジが1本としても全く違う見え方になるので、このパランスとか、濃い黄緑と薄い黄緑というのもあるし、それも自分で糸を全部染めて作ります。

おか：染から入らないといけないんだ自分で。自分の好きな色を。

鈴木：市販の糸だとパターンが決まっています。

おか：大変ですね。

鈴木：準備だけで1ヶ月とか取られたりは全然しますね。

おか：へー。ちょっとびっくりしました。ありがとうございます。

鈴木：準備だけで1ヶ月とか取られたりは全然しますね。

おか：へー。ちょっとびっくりしました。ありがとうございます。

丁寧さ

おか：藤本純輝さんお願いします。植木ですか？想像を超えるものを持てますね。しかも下には鯖缶が。

藤本：アトリエにずっと置いているんですけど、今日持ってくるにあたって鯖缶を取ろうと思ったら下から根っこが出ていてこの状態でした笑。

おか：これはアトリエにずっとあるんですか？

藤本：置いていますね。

おか：これものすごく伸びているじゃないですか。

藤本：伸ばしっぱなし、生やしっぱなしで任せています。

おか：置いてどのくらい経つんですか？

藤本：2年くらいは経っていますね。ちょうどターニングポイントの時にあった学部と院の変わり目で、自分の丁寧さみたいなことを考えていた時に育て始めました。

おか：最初は作品のモチーフとして？

藤本：いえ。モチーフでは全くなくて、気持ちの問題なんです。植物を育てる気持ちの丁寧さが作品に出てきたらいいなという部分だったんです。



おか：育てる丁寧さが作品に出てくる？

藤本：はい。なので毎日見ないと水の状態も分からないし、その伸び方とかそれを全部ここに詰まっていることが全部作品に出てきていて。

おか：これはなくてはならないもの？

藤本：そうですね。ものに対してもしっかりと切って形を整えたりとかってあるかもしれないんですけど、そこはもう僕は作品と一緒に、伸ばしっぱなし、生やしっぱなしで任せて全部この状態がいいなという風に思っています。

おか：それが鯖缶の根っこのところまでいっちゃったということなんですか？

藤本：それもめちゃくちゃ面白いなと思いましたね。

おか：なんで下に鯖缶を置いたんですか？

藤本：単純に下に受け皿があるじゃないですか。それで鯖缶を。ちょうどすっぽりはまるんですよ。

おか：これが作品に向き合う一つのアイテムになっているというのはすごく意外というか。

藤本：よく見てみると分かるかもしれないんですけど、やっぱり葉っぱの色も違うじゃないですか、影になっている部分、光の部分とか。その乱雑さとか一つの丸っぽいものが集まって植物に見えるのは今やっている仕事の絵の具が集まって一つの光景に見えたりとか、色が微妙に違ってたりとかっていうところが繋がっています。

おか：ありがとうございました。色んなものが出てきて面白いですね。

カメラ

おか：続いては茂木山スワンさんをお願いしたいと思います。アトリエにあるものは一体なんですか？

茂木山：カメラです。

おか：これは制作に使うものなんですか？

茂木山：制作に使うカメラです。コンパクトフィルムカメラといって、すごく小さくて機動力が高いんですよ。

おか：機動力が高い？

茂木山：機動力の高いカメラを選んで使っていて、ボタン押すだけで撮れます。

おか：これはあれですか？初心者向きというか、僕らでも使えそうなやつですか？

茂木山：はい、誰でも使えちゃいます。

おか：へえー。

茂木山：最初はいわゆるカメラマンみたいなデジタルカメラを使っていたんですけど、それは重くて日常的に持ち歩くことができなかったんです。それでだんだんカメラが小さくなって、最終形態はこれになりました。

おか：やっぱりフィルムは面白いですか？

茂木山：面白いですね。

おか：独特のフィルムの質感というか写真のそういう面白さっていうものを・・・

茂木山：それもありますし、手作業なので物質感を感じられるっていうんですね。デジタルカメラはカメラが撮って、パソコンに移してという感じですけど。

おか：フィルムは手間がかかりますよね。色ももちろん自分の思い通りにならない時もあったりとか、そういうところの生き物的な面白さというのものもあるのかも。これは何年ぐらい使っているんですか？

茂木山：これが2年くらいですね。2年前からフィルムを始めたので。

おか：2年前からフィルムを始めて今ちょうど楽しんでいる最中という感じですか。

茂木山：楽しんでいる最中です。

おか：制作はそれが一番ですよね。思った以上に軽いですね。細かく使い込んでいる感じもあったり。この黄色のフィルムを見ると、小学校の頃とかそういう時代に

使っていたカメラを思い出します。これからもフィルムで写真作品を作ってください。ありがとうございました。

チャンチン

おか：最後は山下茜里さんお願いします。

山下：これがさっき言っていた道具ですね。この先っぽから熱い蠟が出てきて、こういう線を1本1本。

おか：中は何か入るような？

山下：そうですね。中に脱脂綿とかコットンとかを入れてから蠟がグツグツ沸いているお鍋にすくって、そうすると先っぽから蠟がジャーと出てくるんですよ。ペンで描くような感じで蠟を置いていくんですけど、見ていただいたら分かるようにストッパーとか何も無いです。

おか：無いですよ。出っ放しですよ。

山下：入っている蠟を出しきるまでは、腕をノンストップで動かし続けないといけない。かなり早いスピードで出てくるので、蠟が切れたなと思う瞬間に、また蠟の鍋に入れて蠟をすくうという工程を何回も繰り返します。

おか：これは授業では使っていなかったということですが、また別の道具を使っていたということですか。

山下：蠟染めでは蠟筆という丈夫な筆があるんですけど、筆に蠟を付けて、布の上に置いて染めるというのが大学でも教えてもらえるものなんです。これはタイとかインドネシアとかで使われていて、更紗の小さい柄が描かれているようなものや大判のスカーフを作る時のための道具なんです。

おか：日本のものでは無いんですか。

山下：これは日本で唯一売っているものをずっと使っています。



おか：大学で使っていたものより、この道具の方が自分にはしっくりきたということですね。

山下：しっくりきましたね。それも囲って中に色を染めてという細かい作業をするのではなくて、ドローイング的なストロークで大きく激しい動作で作ることができる場所ですね。

おか：筆とはまた違うということですね？

山下：そうですね。筆だとどうしても、これだけ早いストロークで何かを描いたらかすれてしまうじゃないですか。これはかすれないんですよ。

おか：作品でいうと眼の血液の部分とか？

山下：そうですね。なので血管とか血液が流れるエネルギーがバアーって早く体を巡っていくようなイメージで、蠟を置くようなことをしています。

おか：話をしている様子がものすごく嬉しそうですね。やっぱり楽しいんですね。今ちょうど眼の部分が映っています。こういう部分ですか？

山下：もう全部そうですね。線を置いて染めてを、何回も何回も繰り返して陰影をつけたりしていますね。

おか：筆だと思っていました。聞いてみないとわからないですね。これで2年、3年と使っている？

山下：これはそうですね。2～3年ぐらい使っているんですけど、家に何本もあったり、現地のものを先生から頂いたりってあるので、太さがちょっと違ったりとか。

おか：それでまた線が変わりますもんね。

山下：そうです。

おか：なんか鳥のクチバシみたいで可愛いそうですね、見た目が。これは何か呼び方があるんですか？

山下：「チャンチン」って言います。

おか：チャンチン？それはインドネシアの言葉？

山下：そうです。チャンピンとかチャンチンとか言います。

おか：貴重な道具をありがとうございました。ということで、みなさんにお話しをお伺いしました。ありがとうございました。

A-Lab Exhibition
Vol.28

新展「タイス・ヴェンツォフ・ロヴェット」

河原雪花
鈴木大晴
鎌田佑
藤本純理
夜木山スワン
山下茜里

A-Lab Artist Gate 2021

5/15.sat-6/20.sun

A-Lab

[illegible]

A-Lab Exhibition Vol.28

A-Lab Artist Gate 2021

新鋭アーティスト発信プロジェクト

2020/5/15 Sat - 6/20 Sun

河原雪花 | 鈴木大晴 | 鑑羅佑 | 藤本純輝 | 茂山山スワン | 山下茜里
Kawahara Shikako | Suzuki Daiki | Tetsuro Yū | Fujimoto Akira | Mogiyama Swan | Yamashita Aoi

主催 尼崎市
協力 Baycom

1F エントランス アロビー、廊下

鈴木大晴

- ①「おこつてくること、うつてくること」絹糸・羊毛、2,800×1,700mm (2020)
- ②「2020 木霊けしき」絹糸・羊毛、800×1,200mm (2020)
- ③「2020 山」絹糸・羊毛、800×1,500mm (2020)
- ④「宝石と香」絹糸・羊毛、1,700×1,400mm (2021)

ステートメント

そこには無い空間、息をしている物を作る為、残すに縋ったような技法を使い表現しています。

room1

鑑羅佑

- ③「音む」紙、90×2,110×2,770mm (2021)

ステートメント

金網の壁、土と鉄のアーチ溶接を中心として、その溶接面によって生まれる音は目にしないような象の表情を利用し、作品を制作する。
音は目には行っていない。その経験を活かして創意的な表現を観望する。
一つの技術的慣習が宜いと思うことで生まれる新しいジャンルの表現を目指して活動している。

山下茜里

- ④「Bullet-弾頭-2」反応染料・墨、2,000×9,500mm (2021)

ステートメント

線は断れることも壊さなくなる。
糸は壊さない「目」を作るには、この「目」を削ってしまえばいいと考えた。
紐解く線を一歩で紐解く程を繰り返していく。
あなたが紐解く程に、わたしの目を奪っていくように。
わたしの目にもうあなたは映らない。

倉庫

茂山山スワン

- ⑤「Shake Shake hell」インクジェットプリント・コラージュ、倉庫用1,0580×9000mm / 倉庫用4,775×9000mm (2021)

ステートメント

日常とは違うものの他、日常とはないものがある日突然訪れた。
お祭り、クリスマス、イベントで突如出現るメーヤーゴードン、5月に満期を迎える書籍は年に1度しかない。
日常ではないと思った。
教会、ヴァイオリン、天使、石像などの美術品は壊れた。
毎日日常ではない。
わたしの今までの日々日常に手触れして切れて観ること、わたしは手に取れようとした。

room3、廊下

河原雪花

- ⑥「青い城」切り絵アニメーション・水彩画、15分28秒 (2021)

あらすじ

フィクションのオースワルドの庭で人魚は美しい城を築いている。
夢の中である物語は決して朽ちず、時間が経たずに朽ちてある。ある時は破壊されました。
ゴードン人のレジスト。日本人の夢は人魚に奪われ、オースワルドの庭。夢の世界で出会う。
城は城となり、人魚の夢はいつか城が壊れるまで眠り続け、そして深く眠る。

ステートメント

『青い城』は夢世界を描いたアニメーション映画です。
この作品はゴードン人のいないところ（フィクションの人魚世界）とルーシー・モード・モンゴメリの小説『青い城』をベースとしています。
真なる存在と共に生活することや、女性をとりまく問題について考えながら制作をしました。

和室

藤本純輝

- ⑦「hi_10」油彩・シーツ・絹布、1,620×1,300 mm (2021)

ステートメント

私は、モチーフや素材、色や結晶の配置など、要素を構成する要素と向き合いながら描画を創造する。
素材の持つ性質に着目し、その都度下に用いるものを考えていく。今回は、本来に細い線を生地を組み合わせで重ねていく、シート生地のための細かい質感と画面下の粗粒の質感がぶつかってやわらかい光を生み出す。
各々の肌理の喧嘩による素材の野生は、素材と図像を愛用し、画面にアイリスの野性という名の光景を創出す。

- ⑧「Garden_roadside」油彩・リヨン・絹布・パズル、410×640 mm (2021)

ステートメント

画面の中の情景は現実に小さな四角の額装をもとに、絵師が書き添えていく。
横やフェンスについた植物のように、裏取りをとるものを手がかりとして、素材の野生と合点を創造する。



尼崎市

お問合せ先

尼崎市 文化担当部 文化振興担当

TEL : 06-6489-6385 (イベント時 06-7163-7108)

FAX : 06-6489-6702

E-mail : amalove.a.lab@gmail.com